

かずさの博物誌

キジ(雉)

～ゴージャスな国鳥～

文・写真／成田篤彦



▲キジの雌 体長約60cm
2006年6月23日 袖ヶ浦市＝筆者撮影

五年前の六月のよく晴れた日に小櫃川の土手を歩いている時のことであつた。

茶色の鳥が眼前の砂利道をダツシユして斜めに横切り、草むらに隠れた。大きさはニワトリ位だ。急いでシャッターを切つた。

カメラの液晶画面を拡大すると「キジの雌」と分かつた。

通りすぎて、後ろを振り返ると彼女はU字溝の脇で、首を伸ばしてこちらを見ている。今までこんな雌の姿を見たことがない。

「私を惹きつけている。普段はすぐに藪に隠れるのに。なぜだろう？」

戻つて、深いU字溝の中をのぞくとヒヨコのような三羽のヒナが底にへばりついてた。

「あ！ヒナを連れていたのか？それで彼女は逃げなかつたのか。悪いことをしたな」とすぐにその場を離れた。



▲キジの雄 キジ目 キジ科 留鳥 体長約80cm
2009年4月4日 袖ヶ浦市＝筆者撮影

また、今月、J R内房線の車窓から水田地帯を眺めると、ところどころで、畦の草の間から真っ赤なほほのキジの顔が見え隠れする。時に、放棄水田跡の林の周辺で雄同士が喧嘩している姿や雌に寄り添う雄の姿も見かける。昨年の秋から冬にかけては二番穂を食べに來ている雄や雌のキジもよく見かけた。雄は全身に金属光沢があり、ゴージャスで堂々としている。雌は対照的に地味で野山に溶け込んだ色彩をしている。

この行動と関連して、「焼野の雉子」というたえがある。これはキジが巣を造っている野を焼かれると自分の危ないのを忘れて子を守ろうとするという意味である。

雄も雌も夜は樹上で寝るが、雄はそこで「クオー、クオー」と大きな鳴き声を一度だけ出してその後は静かにしている。興味深いことに、この鳴き声は地震が起きた時も聞かれるそうだ。なお、キジは人工増殖ができるので、狩猟用に多数の放鳥が行われている。味もとてもよいそう

初夏は雄の見事な姿が見られる機会が多くなる。皆さんも一度野山の散策の折に出会おうと良いですね。

さて、キジは北海道を除いた日本の各地に生息するが、世界中で外の地域にはいない。日本だけの鳥という理由で、昭和二十二年（一九四七年）に「国鳥」に指定された。ちなみに、イギリスの国鳥はロビン（コマドリのかなま）、アメリカのそれはハクトウワシである。

ところで、キジの雄はなわばりを造り、その境界では、雄同士の激しい闘争が起こるが、雌雄ともに複数の相手と交尾すると言う。面白いことにそれぞれの縄張りの雄の鳴き声は一匹、一匹、違っていて、聞き分けることができるそうだ。

彼らは地面に足でくぼみを造り、草などを敷いた直径十七～二十五cm



▲キジの雄と雌
2010年5月21日 木更津市＝筆者撮影



▲キジのヒナ
2006年6月23日
袖ヶ浦市＝筆者撮影

（主な参考文献）丸武志「1997『キジ』日本動物大百科鳥類4平凡社